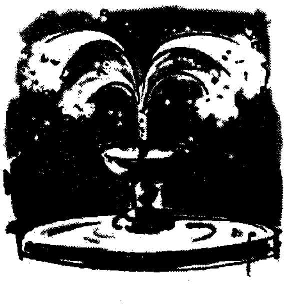
6/30(土) まいど！倫々号です。「今週の倫理」は奥が深い!!
親と子の関係を心の眼を開いて裏側にある真実を見るまなざしを磨き続ける…とか。
幸せ築ごアホー鳥

六月のテーマ　親の子、子の親

わが子の可能性をどこまでも信じぬく



え・城谷俊也

親と子は共に、「祖先から子孫へ連続し続ける生命のバトンリレー」のランナー同士です。

このつなぎは、普通のリレーとは違って、バトンは一個だけではありません。世の規律、物事の捉え方、人間としての生き方など様々で、それら多くのバトンを子供の成長に応じて、しかも数十年間かけながら渡していくという、とても難しいリレーです。

その難しさの一つは、親が〈自分もコース上にいる〉という自覚をなかなか継続できないことです。

自分自身もランナーであることを忘れて、子供に観客席からあれこれと注文するような態度では、バトンは十分に引き継がれません。ましてや、リレーを放棄して、観客席にもいないようでは、家族の繁栄を途絶えさせてしまうことにもなりかねません。常日頃から、親自身がリレーの走者として、良きランナーであるよう努力することが大切です。

倫理運動の創始者・丸山敏雄は著書『学童愛育の書』の中で、「親の心構え」について、次のように説いています。

「正しい親」とは、どんな親でしょうか。親の「あるがまま」のすがたで、子供の前にいっさいを投げ出して少しもうたがわず、心配もせず、子供を信じ、さきざきに限りない希望をもつこと、「子に対する絶対信頼」をもつこと。（中略）

わがままであろうが、ずぼらであろうが、預かり主を手こずらす子ほど、見込みがあります。たのもしいと目をかけて、「絶対抱擁」の心境をもちつづけること。

（『学童愛育の書』より）

ここで述べられているのは、一人前の親心とは〝「絶対信頼」「絶対抱擁」に尽きる〟ということです。わが子に潜んでいる無限の可能性と、それによって切り拓かれていく子供の人生をどこまでも信じ抜くこと。表面上の変化や、現実の善し悪しに一喜一憂することなく、心の眼を開いて、現象の裏にある真実を見るまなざしを磨き続けることです。

「目は口ほどにものを言う」といわれます。心に疑いが生じ、不足不満が起きて、責める意識が働いていれば、子供に向けるそのまなざしも陰険になるでしょう。

たとえ今はどうであろうと、〈だからこそ将来が楽しみ。誰が何と言おうと、あなたが立派に成長してすばらしい個性を発揮し、輝くような人生を送ることを、心の底から信じています〉と、澄んだまなざしで、美しい気を子に送り続けることが、親子のバトンリレーの基盤です。

その上で、次の三つの実践が、バトンリレーをより充実したものへと導いていきます。

①親自身の生活が充実していて「輝き」があること
②子供と相互に学び、心が響きあう「共学」があること
③決して焦って評価を決めつけたり、周囲の評価に動揺しない「ゆとり」があること

「輝き」「共学」「ゆとり」を忘れず、たくさんの愛情を詰めたバトンを次の世代に受け渡していきましょう。